慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	川田侃著 世界経済入門
Sub Title	
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.10 (1963. 10) ,p.997(113)- 998(114)
JaLC DOI	10.14991/001.19631001-0114
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631001-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

山中篤太郎著

『イギリス労働運動小史
——労働運動の理解のために——』

イギリス労働運動史にかんする研究書は多いが、邦文では比較的少ない。山中教授の労作は、その数少ないひとつであって、つぎのような点で注目に値する。すなわち「労働運動とは何か」という序章において、㈠労働運動の意義と重要性、㈡労働運動と労働問題、㈢労働運動における現実と意志、㈣労働運動と労働組合運動という四つの視点から、労働運動の本質にふれようとしていることである。これは、労働運動をもって、革命的政治運動や社会主義運動一般に解消してしまおうとする立場や、あるいはこれと反対に、労働運動＝労働組合運動として、労働運動がもつ多様性を没却しようとするもの（その代表的な立場として大河内一男教授）にたいして、いわばその両者を包括するともいうべき立場に立っておられると思う。ややくわしくみてゆこう。

著者はまず、つぎのように労働運動研究の重要性を訴える。「広く人間の社会のやみ難い発展の論理が、労働運動の中に宿っており……われわれは、労働運動の中に単に労働者の集団的な運動の姿を見るだけではなくて、労働運動の中に全体としての社会の発展の論理が示されていると思う」（三～四頁）。すなわち著者によれば、労働運動とは、資本主義社会の生成とともにはじまった新しい現象であり、重要な社会性をもつところの社会現象であることを強調している。ところで労働運動の発展を、㈠労働組合運動、㈡労働者消費組合運動、㈢労働党ないし社会党運動の三つにわけ、この三者が、あるときはそれぞれ独自に、あるときには、密接不可分の関係において労働運動を構成したというのである。この著者の立場は、G・D・H・コールの労働運動史観と軌を一にするものであり、注意すべきことは、これら三者が、機械的に列挙されるのではなく、労働運動の発展段階のなかで、それぞれに位置づけられなければならないと思う。

つぎに労働運動と労働問題との関係であるが、著者によれば、「社会が、労働問題を社会的に重要な関心の的として意識するようになったのは、特定の労働関係の成立が前提条件となっているわけである」（一四頁）。とのべているが、重要なことは、国民経済が自己の胎内に生じつつある問題として、労働者の問題を認識することから出発するのに反して、労働運動はそうした社会的国民経済的認識を誘発する大きな要因であることである。この点についての評価は、当然、国家による上からの労働運動にたいする対策となってあらわれざるをえない。いわゆる社会政策の必然性もここに胚胎するといわなければならない。

著者はさらに、第三節労働運動における現実と意志において、労働運動の発展は、その国の歴史的な諸条件や、労働者階級の主体的条件の相異によって規定され、運動の展開そのものが複雑な様相を呈することを指摘し、組合の型も、各国それぞれにその特殊性が反映しているとのべているのは興味深い。序章の最後に著者は、労働運動のなかにしめる労働組合運動の重要性を指摘しておられるが、労働組合にたいする政党支配の問題が論議されている今日、注目すべき問題を秘めているといえよう。

以上、筆者は、本書のなかでもっとも重要と思われる序章についてその概略を紹介したが、この部分は熟読するに値すると思う。全体の内容は、

序章　労働運動とは何か
第一章　世界におけるイギリス労働運動
第二章　イギリス産業革命と労働運動の生起展開、
第三章　ヴィクトリア黄金時代と労働運動の確立、
第四章　帝国主義イギリスと労働組合運動の成長、
第五章　経済の統制・計画化と労働組合運動、

イギリスのみならず、日本の労働運動の研究者も、本書をよまれることを期待する。

（春秋社・一九六三年五月刊・B6・二二八頁・四八〇円）　—飯田　鼎—

＊　＊　＊

岡　稔著

『計画経済論序説
——価値論と計画化——』

従来、主として量的な生産増大にその力を集中してきたソ連の経済発展が、最近次第に効率的な生産をその主要な課題とするように、資源や労働力の最適配分の計画化をとりあげる傾向にあることは、すでによく知られていることである。この場合、その計画化の原理としてマルクス経済学の価値論が必要であるのか否かは、ソ連の学者にとってはもちろん、欧米の学者にとっても最大の関心事であった。

これに対して、岡氏はきわめてはっきりした態度をとられる。「社会主義のもとでの計画化と経済計算にかんする一連の最も基本的な問題を、労働価値論との関連をぬきにして取扱うことはできない。というのは量的分析が計算単位としての労働＝価値を欠いては成立しないばかりではなくて、国民経済の計画化ということが、本来、人間労働の節約ということと不可分の関係をもっているからである。」

こうして著者は、価値論にもとづく計画化の方法を、ソ連の学者の無数の論文を整理し、あとづけながら追求している。とくに本書で興味深いのは、価値の統計的測定をあつかって、価値の実測法を紹介しているところと、利潤率について述べている点であろう。価値の測定というのはたしかに斬新な提案ではあるが、自由市場を前提としない場合、賃金をはたして労働価値とみなし得るのか理解できないし、むしろこのような提案に対するクロンロードやクワシャの反論を詳しくききたいところである。

さらに後の問題については、「価値」論者と「生産価格」論者との論争を示し、「生産価格」論者が現実のソ連経済の欠点を意識していたが、その解決を示さなかったとして、ノヴォジロフやカントロヴィッチの議論が最後に紹介されているが、著者自身はこの立場に近いということを意味しておられるのだろうか。

いずれにせよ、この複雑きわまりない論争のジャングルを、そして誰かがやらなければならなかった仕事を手ぎわよく処理された努力にはただ敬服するのみである。

（岩波書店・A5・二七四頁・七〇〇円）　—加藤　寛—

＊　＊　＊

川田　侃著

『世界経済入門』

本書の著者、川田侃助教授は日本ではまだ新しい学問である国際関係論を専攻されてい

る学者である。書名は「世界経済入門」となっているが、もちろん「世界経済学入門」ではなく、主に最近十年間の世界経済の動きのなかの幾つかの潮流についての解説もしくは分析である。そして国際関係論の接近方法よりして、当然世界経済ばかりでなく世界政治についても経済面と同じくらいの、あるいはそれ以上の重点がおかれている。

今日のように急激に変動し、十年前には予想もできなかったよう成長をとげる世界政治・経済現象を学者が学問的に取り扱うことはきわめてむつかしい。発達した通信網のおかげで世界各国のニュースは比較的早く正確にキャッチできるようになったとはいうものの、その中から何が基本的潮流であり、何がそうでないかを識別することが困難だからである。現在まだ流動しつつある世界政治・経済を取り扱って、いわば「きわもの」にならないようにすること、つまり新聞・雑誌の時事解説以上のものにすること、これはなかなかむつかしい仕事であるが、しかし国際関係論にたずさわる者が、むつかしいからといって逃げてばかりいることもよくない。学者は現実に対して批判の眼をむけることを怠ってはならないからである。本書は著者が昨年から今年にかけて各種の雑誌に発表された九編の論文をもとにして構成されているが、時事問題にむかって積極的に取り組まれる著者の多産性と勇気とまた苦心に感服させられる。

本書はそれぞれ三篇づつからなる三部に分れる。I　西欧の抬頭、ではEECを、II　米英の動き、ではイギリスのEEC加盟問題とアメリカの通商政策と西欧との関係を、III　日本の対応、では日本の経済外交を中心テーマとしている。私には、国際間の力関係において現実に力の均衡の存在しうるはずのないこと、そして力の均衡の設定や維持のための努力が実は平和ではなくて戦争を結果することは、すでに十七・八世紀のヨーロッパ政治史以来の公理であることを指摘、日本の外交を批判されている部分がとくにおもしろかった。（東京大学出版会・新書判・二〇七頁・二四〇円）

—矢内原　勝—

＊　＊　＊

アラン・ウィリアムズ著

『財政と予算政策』

「全然毛色の変った入門書というものはないものかな？」　大抵の入門書はそのスタイルも手法も変りばえしない。だから「入門書マニア」ならずとも、こんな疑問を抱く人がでてこないともかぎらない。

財政学でいえば、標準的入門書が教えてくれる財政学の内容と順序は、まず経費論、租税論、公信用論、予算論。それにサーヴィスのよい入門書ならば、地方財政論というおまけまでつけてくれる。財政学という学問の性格からみて、この辺が無難といえばいえなくもない。財政学のカバーすべき領域がそれほどに広すぎるからだ。

ところでウィリアムズのこの入門書ほど毛色の変った本はあまり例がない。その編別構成からして、財政学入門書としての「正統派」的構成から逸脱しているからである。

まずこの本の$2/3$以上は第一部「微視的経済学」とよび、残りの$1/3$以下は第二部「巨視的経済学」というスタイルをとっている。第一部は十一章あって、第九章までは定額税、個人所得税、支出税、財産税、利潤税、売上税などの微視的厚生分析がおこなわれる。第十章で政府支出も同様に扱われ、第十一章で予算のもつ再分配効果と帰着の問題が問われている。第二部をみると、当然のことながらこんどは、個人に与えるある租税の厚生効果ではなくて、個人全体を通じて経済全体に与える効果が問題となる。第十二章では直接税と間接税の比較、貯蓄・投資に与える予算の効果などを検討する。第十三章で経済安定にたいする財政収支の効果、第十四章で経済成長にたいする同じ効果を扱う。第十五章では予算と経済政策との関連を総括的に論じてしめくくりとしている。

序文で著者がすでに断り書をしているように、この本はイギリスの大学二年生以上を対象としているが、大学制度で一年ズレがある日本でならば三年生以上ということになろう。つまり大学ですでに「経済原論」を学んだ学生に、経済学の一環としての財政学の理論を教えようとすることに本書の意図があるようだ。

だから制度論は一切ぬきにして、まず単純な仮定から出発して、たとえば所得税と支出税のどちらが経済的厚生、消費、貯蓄、余暇を相対的に損わないですむか、という問題に一応の結論がだされる。それも説明の手段はすべて図解により、数学は一つもない。なにもかも眼に訴えてだれにでもわからせようという著者の苦心のあらわれであろう。しかし全体を通じて一五八図がずらりと並ぶと、いかに、根気のよい入門者でずら図解過剰に悩まされるのではないだろうか。

「財政と予算政策」という表題のもとで著者が意図したものは、財政分析で制度的・実証的分析が欠くべからざるものであるにせよ、理論的分析はそのためにも不可欠であることを強調することにあったようだ。そしてその意図はそれなりに成功しているというべきだろう。ただし第一部「政府支出」と第二部全体は一層の拡充と深化の余地がまだまだ残されていよう。

著者アラン・ウィリアムズは英国エグゼター大学に勤務。その経歴は不詳である。著者名および書名は、Alan Williams: Public Finance and Budgetary Policy, 1963. (George Allen & Unwin Ltd. 二八三頁、四〇シリング・ネット)

—古田　精司—

＊　＊　＊

S・モルニエ他著
栗田勇、浜田泰三訳

『コンミューンの炬火
——ブランキとプルードン——』

本書は一八四八年二月革命の百年記念のために、S・モリニエがブランキを、S—L・プルードンについて、それぞれ書いたものの翻訳である。したがって「コンミューンの炬火」という訳題はブランキについてはあてはまるにしても、プルードンについてはまったくあてはまらないことになる。パリコンミューンへの興味から本書をひもどかれる人は、趣旨の点でも内容の点でも、本書が、一八七一年パリ・コンミューンに焦点を合わせている訳ではないことに注意する必要がある。もちろん、プルードンは一八六五年にその生涯を終っている。おそらく本書に「コンミューン」という名を付したのは、名のみ高名なこの思想家たちを現実のフランス社会運動、革命的諸事件の中で生きかえらせたかったためだろう、と推察することはできるが、少くともプルードンについては、誤解をさける用意がほしかった。

本書はブランキについてもプルードンについても、理論的分析というよりは評伝に近い。思想分析がなされるとしても、それ自体としてなされるのではなくて、その生涯、その行動との関連の中で解説される。したがって本書はこの種の評伝がもつ利益と欠陥とを併せもっているように思える。利益とは、これら二人の高名な思想家を思想の中だけにと